

組合員による組合員のための抜根事業
そこには先人たちの労苦と思いがつまっていた

J A 相馬村 抜根事業の歴史

組合員による抜根事業

園地更新の歴史は抜根の歴史でもあり、試行錯誤をしては時代に合ったやり方を模索してきた。昭和41年から園地更新を推し進めてきた当時の当J A石岡昭弘参事が、昭和50年代後半、新規就農をしてコンボを所有していた成田光生さんに「品種更新事業に抜根が必要だがやってみないか」と声をかけたことから、組合員による抜根事業が始まった。

本特集で、その40数年の歴史を見ていきたい。

品種更新事業の背景

明治の末、主要品種は国光（こく）

こく）と紅玉であり、青森県だけを見ても75%もの高率を示していた。しかしその比率が長期に渡って非常に高く、また戦後の果樹産業の振興で多様な良品質果実が流通しはじめたこともあり衰退の一途をたどる。国光は本質的に品質が劣り、紅玉はその特徴の酸味が甘味志向の消費者に合わなくなってきたことに加え、着色していれば早期出荷が有利販売になるとして、酸味のより強い未熟果が流通してしまい需要が急速に減退した。

これが昭和40年代初頭のりんごの大不況であり、出荷経費さえ補填できず、収穫果100万箱が山や川に棄てられる「山川市場」と呼ばれる状況すら現出した。その後、基幹品種を巻き込んだ全国規模の品種更新が行われた。

相馬村りんご品種更新 推進協議会発足

昭和41年2月、村、農協が主体になり、指導機関、関係組織を網羅し、協議会を設立した。経済的に有利、且つ合理的な品種構成の促進を計り、相馬村りんご産業の発展に寄与することを目的とし、国光・紅玉から、ふじ・スターキング・王林・ジョナゴールドと、新品種に更新した。

また、計画を具現化し普及するための協議会活動を補完する目的で、実践団体として「りんご愛好会」が3年半後に設立された。

昭和44～45年は、農協通常総会の会場（相馬中学校体育館）の裏側で芽つぎ用穂木を無償で配布。国光、紅玉などの品種は老木の抜



昭和49年4月 りんご愛好会、第6回通常総会

根を進めることと平行して、健全な樹については台木とし、配布された新品種を接ぎ木することも進められた。

爆薬による抜根、

植穴掘り

抜根及び植穴掘りに爆薬を利用することは、粗皮病治療とりんご樹を育成しやすい状態にする効果



昭和50年頃 積極的な高接更新



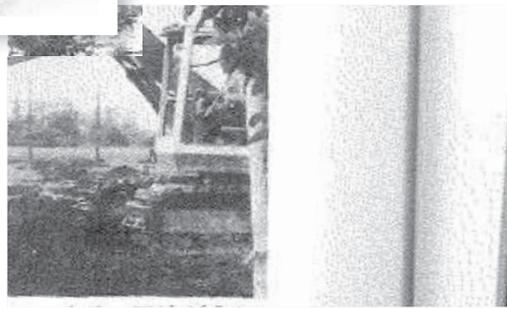
爆薬による植穴掘り



りんごの土壌改良に活躍した
石灰注入機



昭和49年 りんご愛好会視察 新品種にみとれる



ユンボによる天地返し作業

が大きく、実演会を実施したところ1千発余りの申込みがあった。当時は助成もあったが、その後取締りが厳しくなり、補助事業は打ち切りへ。しかし効果が高いことから53年頃まで実施されていた。

平成の品種更新

平成15年から3年間、当JAでは緊急事業推進強化策が断行された。そのうち4つのある柱の第一番目に、飛馬印りんごの銘柄再構築を掲げて、売れる品種と系統更新を推進したところ、苗木の申込みは約二万本あった。

背景にはりんご価格の低迷がある。特に平成13年産りんごは、4月の低温と降霜による結実不良や変形が発生するなどの被害を受けたほか、長引く経済不況が影響し1〜3月にはkg100円台に落ち込むほどの超安値であった。ただ収穫量前年比116.4%と多かったことから生産者の手取額はそこまで悪い訳ではなかった。しかし、生産費を補える価格ではなかったため、将来を見据えて前述の品種

更新を推し進めたのである。

「品種に勝る

技術なし」

現代に立ち返ると、温暖化による果面ヤケや着色遅れ、高齢化や補助労働力減少による着色管理に係る労力確保の難しさ、春の天候不順による着果不足や摘果遅れによる隔年結果で収量の増減が大きいのことなど、課題は山積である。

これらの課題を解消するため、当JAは現在、早生種・中生種の赤色品種における着色管理の軽労化と着色基準の見直しを図るほか、当JAが指定する着色優良系統への更新に対して、助成をしている。制度を開始した令和2年秋から令和4年春までの苗木助成本数は合計で4,531本のぼこいる。

このように、日々変化する気象・流通・消費者嗜好に対応するため品種更新が行われ、そこには抜根事業が常に必要不可欠である。次頁からは、現在の抜根事業に携わる組合員を紹介したい。